

Melting scenery

無数の光の点はディスプレイ上で様々なイメージを描き出す。

大越は自らが収めるイメージを光景と呼ぶ。本作ではそれらの連続する光景を写真という物体として取り出し、除光液により物理的で不可逆な損傷を与える。

その表層は冬場の皮膚のようにポロポロと剥がれ落ち、イメージに手触りの感覚を見せる。大越により物質として取り出されたイメージは翻ってディスプレイ上にも質感を呼び寄せるようだ。

Surface drawing

『Surface drawing』ではスマートフォンで撮影したセルフポートレートに加工アプリ上で深度測定を行ない、その仮想の奥行きをマッピングする。深度測定とは写真を一眼レフで撮影したような質感にするために画像内の奥行きを測るものである。

その結果出力されるものは、より良い、きれいな写真となるはずだが大越の捉えるものはひどくひしゃげ、外見的特徴は疎かまはや顔かどうかもわからない点の集合であった。

スマートフォンで撮影される写真はその手軽さ故に今や誰もが自分を表現することのできるコミュニケーションツールの一つとなった。カメラの機能向上や、加工アプリはコミュニケーションの意欲をも高揚させるようだ。私たちはあたかもこれらで世界中と繋がっているかのような安心感を得るが、その実際はデータを可視化しただけのものだという事を改めて実感させる。

箱の中に帰す/箱の中の猫〈身体〉を、観測〈表示〉する時

『箱の中に帰す』、『箱の中の猫〈身体〉を、観測〈表示〉する時』の2つはそれぞれハンドスキャナーで身体の一部をスキャンした作品である。スキャナーは元来、平面上で表されたアナログのイメージをデジタルに変換するものだが、大越はそれを自らの身体に使用する。

凹凸のあるものに対し、ハンドスキャナーは密着できない部分を黒で表現する。

そしてそれらを再び平面に戻したものを、一つはターポリンにもう一つはディスプレイ上に出力される。背面と思われるディスプレイのイメージは滑らかな肌の質感を残すが、ターポリンに出力された顔のスキャンは、近寄るとそのイメージが無数のキューブによって表されていることに気が付く。本来近寄れば近寄るほどその凹凸に気がつくはずのものが無機質な図形で描かれている不気味さは、私たちが日常で受け取る情報についてその不確かさ、解像度について気づかせるようだ。

惨劇のアーキテクチャ

アリの群れは、飽きることなく目の前の砂糖に群がる。この事象はありのただの食事風景に過ぎないだろうが砂糖はおそらく作者により人為的に落とされたものだろう。

SNSの炎上はその真意に問わず、匿名の人々の憶測が呼水となりその範囲を拡大させる。これらの行為は意図的であるかないかにかかわらず砂糖のようなご馳走となり、人々は誘い出される。悪意、正義が入り混じった砂糖はそれを求める人により今日も生産され貪られ世界を構築していく。